



# TCFD提言に基づく開示

## TCFDへの対応

パナソニックグループは2019年5月にTCFD\*1提言への賛同を表明し、気候変動に関するリスクと機会が重要な経営課題であるとの認識のもと、同提言を踏まえてリスクと機会を特定し、シナリオ分析による戦略のレジリエンスを検証しています。

当社としても上記の認識と検証結果に基づき、当社事業に特有のリスクと機会への考察を深め積極的な情報開示を図ることで、ステークホルダーの皆さまとの対話を強化すべく、TCFDが推奨する開示項目である「ガバナンス」「戦略」「リスク管理」「指標と目標」について情報開示を行っています。

\*1 Task Force on Climate-related Financial Disclosuresの略で、G20財務大臣・中央銀行総裁会議の要請を受けて、金融安定理事会により設置された気候関連財務情報開示タスクフォースのことであり、2017年に提言を公開

 パナソニックグループ「環境：TCFDへの対応」  
<https://holdings.panasonic.jp/corporate/sustainability/environment/tcf.html>

## ガバナンス

当社では、取締役会が、ESG委員会からの年一回以上の報告・提言に基づき、気候変動に関するリスク・機会を監督しています。

同委員会は社長を委員長とし、環境担当部門のほか、事業部、人事、法務など気候変動対応に関する部門の責任者である全執行役員が委員を務め、全体計画の立案、進捗状況のモニタリング、達成状況の評価を組織横断体制で行っています。

また、並行して気候変動に関するリスク・機会を分析し、その結果に基づき当社の事業戦略の妥当性をレジリエンスの観点から確認しています。

加えて、執行役員のコミットメントを強化すべく、短期および中期の業績を反映したインセンティブである業績連動報酬について、財務指標とともに気候変動関連の成果も反映する仕組みとしています。

## 戦略

社会の低炭素経済への移行に向けて、当社では目標を次の通り定めています。

- 2028年度：自社のCO<sub>2</sub>実質ゼロ工場\*2全拠点
- 2030年度：約4,500万トンのCO<sub>2</sub>削減貢献量創出

上記の目標を策定するとともに当社戦略のレジリエンスを検証すべく、TCFD提言の枠組みに沿ったシナリオ分析を実施しました。

\*2 省エネ推進や再生可能エネルギー導入、クレジットの活用などにより、CO<sub>2</sub>排出を実質的にゼロとした工場

シナリオ分析では当社の財務パフォーマンス上大きな割合を占め、かつ社会のCO<sub>2</sub>削減貢献への寄与が大きいモビリティエナジー事業およびエナジーソリューション事業の一部を対象に下記の通り実施しました。

- 想定期間：2030年度、2050年度
- 採用シナリオ：パナソニックグループのシナリオ分析で採用した1.5°Cシナリオ、および4°Cシナリオを含むシナリオ群に基づきリスクと機会を特定しました。詳しくはパナソニックグループ「環境：シナリオ分析による戦略のレジリエンス」の4つのシナリオを参照ください。

 パナソニックグループ「環境：TCFDへの対応 シナリオ分析による戦略のレジリエンス」  
<https://holdings.panasonic.jp/corporate/sustainability/environment/tcf/resilience.html>

## リスク管理

当社は「エンタープライズリスクマネジメント委員会」(以下「ERM委員会」)を設置し、気候変動関連を含む各種リスクの一体的な管理を行っています。

ERM委員会はリスクマネジメントのPDCAサイクルに基づき、重要なリスクや対応策の進捗等を定期的に経営会議や取締役会で報告しています。同委員会では「影響度」と「発生可能性」の観点からリスク項目を毎年抽出し、このうち事業活動に影響を与える可能性があり、オペレーション上の「脅威」となる事象を「オペレーションナルリスク」と定義しています。2024年度も、地震・津波などの自然災害を重要なオペレーションナルリスクと特定し、浸水などの対策について進捗管理を行いました。

また、当社にとっての移行リスクである環境規制への対応コスト増加などについては、関係部門にて動向を注視し適切な対応を図り、経営会議において進捗を管理しています。中でも欧州電池規則においては年4回関係部門と経営層を含めた会議にて進捗の管理や課題提起をすることで、事業活動へのリスク管理を徹底しています。

## 指標と目標

当社では、GHG排出量(Scope1、2、3)の実績値を開示するとともに、2028年度に自社のCO<sub>2</sub>実質ゼロ工場\*2を全拠点とする目標を設定し、排出量削減の取り組みを進めています。

また自社以外のGHG排出に関しても、社会におけるCO<sub>2</sub>削減貢献量や、サプライチェーン上流を含む製品のカーボンフットプリント削減について目標を定めています。

加えて、上記の各指標を総合した当社独自の指標として「環境貢献指数」(当社電池の生産における実質的なCO<sub>2</sub>排出量に対しCO<sub>2</sub>削減貢献量が何倍か示す指標)を定め、2030年度に10とすることを目標とし向上に取り組んでいます。当社の目標設定と達成への取り組みについては、環境ページにて詳しく述べています。

## 重大なリスクと機会への対応

重大な気候関連のリスクと機会として抽出された項目は次の表の通りです。それぞれの項目に対して、主に該当するシナリオ、発現時期、影響度、および対応策を記しています。発現時期や影響度に基づいて、優先順位をつけながら順次対応を進めています。

項目	当社への影響	1.5°C	4°C	発現時期	影響度	対応策
移行リスク	カーボンプライシング導入によるコスト増加			中期	大	●省エネ推進／再生可能エネルギーの利活用
	製品・サービスに関する環境規制への対応コスト増加			短期	小	●規制の高度化にも対応可能な汎用的なシステムの導入
	電池の高性能化のための研究開発・設備投資コスト増加			短期	中	●研究機関やパートナー企業との協働研究による開発の効率化 ●技術・モノづくりアカデミーの運営による社内への技術伝承
	省エネルギー対応および再生可能エネルギー導入のためのコスト増加			短期	大	●再生可能エネルギー調達量の拡大
	社会／顧客要請への対応遅れによる売上減少			短期	大	●欧州電池規則/GBA/RBA等への確実な対応 ●業界団体への積極参画による政策枠組みの先導
	原材料価格の高騰・素材の切り替えによる調達コスト増加			中長期	大	●電池のリユース拡大／リサイクルスキーム構築 ●工程廃材排出削減、ロス抑制に寄与する 製造プロセスの見直し
物理リスク	風水害の激甚化に起因する自社拠点やサプライチェーンへの損害による売上減少／コスト増加			短期	中	●現地調達化によるサプライチェーンの短縮 ●重要部材のBCP対策推進
	海面上昇に起因する自社設備やサプライチェーンへの損害による売上減少／コスト増加			長期	小	●サプライヤーのリスク評価
	暑熱や寒冷に起因する従業員の健康リスクによる売上減少／コスト増加			短長期	小	●職場における感染症対策の推進 ●従業員の心身の健康づくりに向けたセミナー／プログラムの実施
機会	資源効率を高めることによるコスト削減と生産効率向上による売上増加			中長期	中	●電池のリユース拡大／リサイクルスキーム構築／廃棄物抑制 ●高容量化／長寿命化／大径化
	エネルギー価格の低下によるエネルギー調達コスト削減			中長期	中	●市場価格に応じた再生可能エネルギー選択の見直しと 調達量の拡大
	環境貢献製品・サービスの需要増加による売上増加			短期	大	●環境貢献製品・ソリューションの拡大 ●環境先進企業としてのイメージの打ち出し
	災害対策製品・サービスの需要増加による売上増加			中長期	大	●産業用バックアップ電源や家庭用蓄電池事業の拡大 ●災害時の備えとしての乾電池の打ち出し